

### 第3節 災害と文化的景観

#### はじめに

和歌山県は災害県と称されるように、梅雨時には前線活動の影響により大雨に見舞われることが多く、また頻繁に台風の進路にもあたることから、毎年のように風水害による災害を被って来た。県南部の山地は、年間降水量が3,000mmを越える多雨地帯であり、県土の約8割が山地で占められていることから土砂災害が頻繁に発生しやすい気候特性を有している。近年においては、河川改修が進んだことから、大規模な水害は減少したものの、過去においては有田川や熊野川などの大規模河川の氾濫による災害が多数発生している（表3-19）。また、東南海・南海地震は、約90年から150年周期で繰り返し発生しており、近年では1944年（昭和19年）の昭和東南海地震、1946年（昭和21年）の昭和南海地震によって甚大な被害が発生し、地震災害の発生も危惧されている。

急峻な山地に囲まれ、有田川をはじめとした河川流域や山地斜面に農地や集落が展開する蘭島の文化的景観地域は、これまで度重なる有田川の氾濫や土砂災害による被災と復興を繰り返しながら現在にいたっている（写真3-19～21）。特に昭和28年7月18日に発生したいわゆる7.18水害、さらに水害の応急修理を破壊流失させ、惨禍を加えた同年9月の台風13号は、景観のみならず、人々の生活、生業、生態系などあらゆるものに甚大な影響を与えた極めて大きな自然災害として人々の記憶に残されている。また、この大水害の体験者と未体験者では、景観認知が大きく異なっているなど、近代以降における文化的景観の変遷において最も大きな時代画期となっている。

以下では、当地域の農村景観を変容させる最も大きな要因となる災害について、近代以降の主な災害を概観しながら、景観の影響と変化について、記述を行う。



写真3-19 増水に浮かぶ蘭島 提供：西林輝昌氏  
初夏の蘭島。大雨によって増水した有田川の中で、  
棚田が必死に堪えているようだ表現された一枚。



写真3-20 流木で埋め尽くされた有田川  
昭和11年4月25日撮影 写真奥は清水橋



写真3-21 第2室戸台風による河川の増水  
昭和36年9月撮影 写真右は清水橋

表 3-19 近代以降における和歌山県内の主な災害

年号	年	西暦	月日	災害事項	
明治	3	1870	9月18日	紀ノ川大洪水、流失家1000軒、死者200人、新宮藩損壊家屋630戸、半壊800戸。有田川洪水、家屋の流出多数。	
	9	1876	9月17日	有田川洪水、鳥尾川の堰切れる。	
	15	1882	7月18日	有田川洪水	
	19	1886	9月24日	各河川増水、紀ノ川水位1丈2尺、和歌山市内の被害、罹災戸数62。有田川の板尾橋流出	
	22	1889	8月19日	暴風雨により各河川氾濫、浸水家屋2900戸、損壊3200戸、流失家屋2400戸死者1221人その他被害甚大。有田川大洪水。	
	34	1901	7月2日	有田川洪水、金屋橋流出	
	36	1903	7月8日～9日	紀ノ川をはじめ、各河川出水、四ヶ郷村のみで死者2人。有田川増水により金屋橋・安達橋流出。	
	37	1904	7月9日～10日	台風紀伊水道を北上、各地暴風被害あり。24時間雨量は北山村521.5mm、本宮366.2mm。	
	38	1905	7月26日	県北部に雷雨、有田、那賀の山地に200ミリ以上の豪雨。有田川大洪水で鳥屋城村・市場村被害甚大。	
	43	1910	5月10日～11日	台風紀伊半島に上陸、稀有の暴風雨となり、死者70人に及ぶ。	
			9月22日	有田川洪水により堤防10ヶ所決壊し、橋梁流出、田畑家屋浸水、井堰決壊など被害大。	
	大正	1	1913	9月23日	台風紀伊水道を北上大阪へ上陸、本県各地風雨高潮となり、被害甚大。
		5	1916	9月24日	有田川洪水、一丈5尺、市場橋御橋流出
		6	1917	10月10日～11日	台風の影響で死者、有田郡5人、西牟婁郡13人、東牟婁郡3人。
7		1918	7月12日～13日	12日未明～13日夕刻にかけ、暴風雨となり、人畜の死傷、家屋倒壊等被害大。	
			9月24日	台風により暴風雨となり、死者5人、家屋倒壊111戸、家屋浸水340戸。	
10		1921	7月13日	台風、四国中国を縦断、北上したため本県では被害総出、死者3人、家屋損壊、流失138戸。	
			9月25日～26日	台風、紀伊半島南端に上陸北進、全県下暴風雨となり被害甚大。死者12人、家屋流失、全壊279戸。	
12		1923	6月22日	各河川出水、紀ノ川増水15尺、御坊町、家屋損壊3戸、死者2人。豪雨、出水	
14		1925	8月14日	東牟婁山地に300ミリを超える所多く、熊野川出水、浸水流失家屋を出し、太田川、紀ノ川も出水、被害を出した。	
			7月7日	県下各河川増水、電車橋本付近で転覆。有田川出水、金屋橋通行止め	
			9月4日	東牟婁郡で死者4人、負傷者21人、行方不明21人、家屋流失、損壊、浸水573戸。暴風雨	
			7月7日	有田川出水。金屋橋通行止め	
昭和		1	1926	7月1日～2日	各地で200mm以上の降雨。有田川増水、田殿橋・金屋橋流出。日高川、日置川流水被害あり、各所に山崩れあり。
		7	1932	7月1日～2日	各地で200mm以上の降雨。有田川増水、田殿橋・金屋橋流出。日高川、日置川流水被害あり、各所に山崩れあり。
	8	1933	10月19日	暴風雨により紀北の被害大。有田川洪水	
			9月21日	室戸台風。死者31人、行方不明者6人、住家全壊2628戸、半壊2602戸、浸水4365戸の被害あり。	
	10	1935	3月23日～24日	高野山から有田奥地烈風、八幡村納屋倒壊1戸、半壊家屋5戸、半壊付属建物2戸、損害家屋13戸。	
			6月24日	高野山一帯豪雨、有田川、貴志川洪水。被害は木材流失9000本、橋梁の流失21、耕地浸水60町歩。	
	11	1936	4月21日～22日	21日から22日明け方にかけて県下一帯強風豪雨、有田川、日高川、十津川増水、木材流失の被害甚大。	
	14	1939	10月15日	暴風雨により24時間雨量、下里で480mm、潮岬で479.1mm、1時間最大雨量112.5mmの豪雨。有田川洪水。	
	16	1941	6月11日～29日	300mmを超える豪雨あり、紀ノ川の重要橋樑ごとごとく流失。和歌山で436mmの降雨を記録。有田川洪水。	
	17	1942	9月19日	暴風雨により各河川増水被害大。有田川田殿橋流出。	
			10月3日～8日	暴風雨により各河川警戒水位を突破し、道路、橋梁の被害大。暴風雨洪水	
	19	1944	12月7日	東南海大地震、死者34人により被害甚大。	
	20	1945	9月17日～18日	枕崎台風、この台風の余波をうけた本県では潮岬風速27mに達した。被害大。	
			10月3日～11日	アズネス台風による暴風雨となり、雨量は下神野591mm、龍神513mmをはじめ、各地で洪水となる。	
	21	1946	12月21日	南海地震、4時19分県下全域は強震に襲われ、大津波を伴い稀有の被害をもたらした。	
	23	1948	8月26日～27日	有田水害。有田郡中部を中心に猛烈な豪雨あり。各地で河川が増水、特に有田川、日高川は氾濫被害甚大。	
	24	1949	6月18日～21日	梅雨前線、デラ台風のため県下暴風雨となり、特に紀南に甚だしく、被害総出した。	
	25	1950	9月3日	ジェーン台風が紀伊水道を北上し、和歌山県下各地に稀有の大風水害をまねいた。	
	26	1951	10月14日～15日	ルース台風の余波により、負傷者、家屋倒壊、浸水等、被害16億円に上った。	
	27	1952	6月23日	ダイナ台風上陸により死者4人をはじめ被害大。	
	28	1953	7月10日～11日	7月10日大洪水、和歌山気象台観測開始以来、最大の豪雨で、被害総額51億円余に上る甚大な被害をうけた。	
			7月18日	718水害。死者615人、行方不明者431人、住家全壊4231戸、半壊5820戸、流失4451戸、浸水273997戸、被害総額約807億円	
			9月25日	台風13号により全県下にわたり大暴風となり、718水害の応急修繕を破壊流失させ、さらに修繕を加えた。	
	29	1954	2月27日～28日	有田川増水。八幡村で飯橋流失、岩倉、城山村で山崩れ5ヶ所、木材3000本流失。	
			4月12日	朝から暴風雨となり、有田川、日高川上流と東西牟婁郡の所々は100mm前後に及び、各河川増水。	
			5月24日	低気圧による暴風雨となり、有田川、由良川、熊野川流域で被害大。	
	30	1955	6月30日	梅雨前線により暴風雨となり、死者4人、負傷者30人。家屋の全壊、半壊流失等被害は紀ノ川流域に特に多い。	
	32	1957	4月	暴風雨により清水橋流出	
			9月26日～27日	台風15号により、和歌山市で24時間雨量296.1mm、紀ノ川船戸の水位5.1mに達し、被害甚大。	
	33	1958	8月25日	台風17号の影響で、南部8市町村に災害救助法が発動。被害甚大、罹災者14720人。	
			9月26日	伊勢湾台風。死者6人、行方不明12人、住家全壊221戸、半壊901戸、流失157戸、浸水9722戸、被害総額約71億4500万円	
	35	1960	8月29日	台風16号。死者2人、全壊28戸、流失1戸、半壊109戸、床上浸水2169戸、非住家被害297戸、罹災者数10429戸、被害総額約24億8000万円。	
	36	1961	9月16日	第2室戸台風。死者15人、行方不明1人、全壊2845戸、半壊8556戸、流失145戸、浸水25368戸、被害総額約339億円。	
	40	1965	9月16日～17日	台風24号により、死者3人、行方不明2人、負傷者3人、住家全壊8棟、半壊30棟、浸水2099棟。	
	44	1969	8月13日～15日	台風13号により、住家全壊2棟、半壊2棟、浸水1503棟。	
	45	1970	7月28日	台風4号により、負傷者5人、住家全壊2棟、半壊2棟、浸水766棟。	
	46	1971	8月25日～29日	台風10号、秋雨前線による大雨により、死者10人、住家全壊6人、半壊15人、浸水2275棟。	
	47	1972	6月20日～7月18日	豪雨により、負傷者4人、住家全壊7棟、半壊14棟、浸水4899棟。	
			6月15日～7月6日	梅雨前線及び台風2号により、住家全壊2棟、半壊1棟、浸水577棟。	
			7月24日～25日	豪雨により、住家全壊1棟、半壊2棟、浸水2119棟。	
	49	1974	8月30日～31日	台風22号により、死者1人、浸水311棟。	
	50	1975	6月6日～8日、6月12日	豪雨により、住家全壊2棟、半壊2棟、浸水575棟。	
			7月4日～6日、	7月豪雨により、住家全壊3棟、半壊8棟、浸水1662棟。	
	51	1976	9月16日	台風20号により、住家全壊14棟、半壊167棟、浸水5365棟。	
			7月4日～7日	豪雨により、負傷者4人、住家全壊6棟、半壊13棟、浸水5011棟。	
	53	1978	6月21日～26日	梅雨前線豪雨により、浸水501棟。	
	54	1979	8月23日～24日	台風6号により、負傷者2人、住家全壊7棟、半壊5棟、浸水7990棟。	
			9月8日～13日	台風17号により、住家半壊3棟、浸水14985棟。	
	55	1980	5月7日～9日	豪雨により、浸水567棟。	
			6月16日～8月7日	豪雨により、死者1人、住家半壊3棟、浸水2723棟。	
		9月24日～10月1日	台風16号により、死者1人、負傷者21人、住家全壊35棟、半壊228棟、浸水3522棟。		
56	1981	10月14日～20日	台風20号により、死者2人、浸水420棟。		
57	1982	10月4日	台風19号により、死者1人、負傷者5人、住家全壊1棟、半壊1棟。		
55	1980	10月18日～19日	豪雨により、死者2人、浸水851棟。		
57	1982	7月31日～8月3日	台風10号により、死者5人、住家全壊7棟、半壊3棟、浸水6150棟。		
59	1984	4月19日	豪雨により、住家全壊1棟、浸水997棟。		
61	1986	6月21日～7月4日	梅雨前線による豪雨により、住家一部損壊1棟、浸水869棟。		
63	1988	6月2日～3日	豪雨により、死者1人、住家半壊1棟、浸水14棟。		
平成	1	1989	9月6日	豪雨により、住家半壊1棟、浸水1916棟。	
			9月24日～25日	豪雨により、負傷者21人、住家全壊1棟、住家半壊20棟、住家一部損壊326棟、浸水808棟。	
	2	1990	9月2日～7日	豪雨により、住家全壊2棟、住家一部損壊3棟、浸水9492棟。	
			9月19日～20日	台風22号により、死者1人、浸水2606棟。	
	3	1991	9月17日～21日	台風19号により、行方不明1人、負傷者7人、住家全壊2棟、半壊79棟、一部損壊7022棟、浸水589棟。	
	7	1995	8月22日～23日	豪雨により、浸水632棟。	
	9	1997	1月17日	兵庫県南部地震（阪神大震災）により、負傷者7人、住家一部損壊171棟。	
	10	1998	7月1日～6日	豪雨により、住家一部損壊14棟、浸水2267棟。	
			10月1日～2日	豪雨により、死者3人、負傷者4人、住家全壊5棟、半壊5棟、一部損壊2棟、浸水193棟。	
	11	1999	7月26日	台風9号により、負傷者2人、住家一部損壊28棟、浸水1011棟。	
			5月16日	豪雨により、住家一部損壊1棟、浸水616棟。	
	12	2000	9月21日	台風7号により、行方不明1人、負傷者56人、住家全壊10棟、半壊104棟、一部損壊4790棟、浸水75棟。	
	13	2001	9月10日～12日	豪雨により、住家一部損壊1棟、浸水1081棟。	
			6月19日	豪雨により、負傷者3人、住家全壊1棟、半壊1棟、浸水314棟。	
	15	2003	8月19日	台風11号により、住家一部損壊7棟、浸水443棟。	
	16	2004	9月30日	豪雨により、負傷者1人、住家一部損壊91棟、浸水1129棟。	
			6月20日～21日	台風6号により、行方不明2人、負傷者5人、住家半壊2棟、一部損壊2棟、浸水6棟。	
18	2006	9月5日	紀伊半島沖を震源とする地震及び東海沖沖を震源とする地震により、負傷者5人。		
		10月20日～21日	台風23号により、死者2人、負傷者6人、住家一部損壊26棟、浸水147棟。		
23	2011	8月30日～9月4日	紀伊半島大水害。死者56名、行方不明者5名、住宅の全壊367戸、半壊1840戸、住宅の床上浸水2680棟、床下浸水3147棟。		

出典：和歌山県災害史・和歌山県地域防災計画

### (1) 明治 22 年大水害

明治年間において、最も大きな被害を出した水害である。四国中部を北上した台風は、8月18日から19日にかけて紀南地方を直撃し、県内全域に大きな被害をもたらしたが、特に被害が大きかったのは西牟呂郡、東牟呂郡、日高郡、有田郡であった。各河川は氾濫し、県内における浸水家屋は33,081戸、流出家屋3,675戸、全壊家屋1,524戸、半壊家屋2,344戸、死者1,247人、牛馬死亡229頭、橋梁流出931ヶ所、船舶流失247艘、被害農地・宅地8,372町歩、山崩れ31,400ヶ所に及んだ。

有田郡では、湯浅で24時間雨量が520mmを観測し、8月18日午後10時には有田川の水位が約5m上昇し、所々で堤防が決壊した。有田郡における被害状況は、流出家屋282戸、被災家屋518戸、死者25人、負傷者40人、牛馬死亡36頭と甚大であり、当時の回想によると、1ヶ月が経過しても茫然自失してなすすべがなかったという。

当時の被災状況を描いた有田川流域水害図をみると、有田川上流域では堤防の決壊や家屋の影響は少ないが、有田川と支流沿いが広く浸水被害を被っている状況がみられ、蘭島の文化的景観地域においても蘭島、西原湯子田、湯子川の大半の水田が浸水し、耕地の流出をはじめとした大きな影響を受けたことが想像される(写真3-22)。また、有田川下流域では、各所で堤防が決壊したことによって広範囲に被害が及び、甚大な被害を被ったことが分かる。その被災状況は、昭和28年の7.18水害と同程度の大水害であったことが想定される。

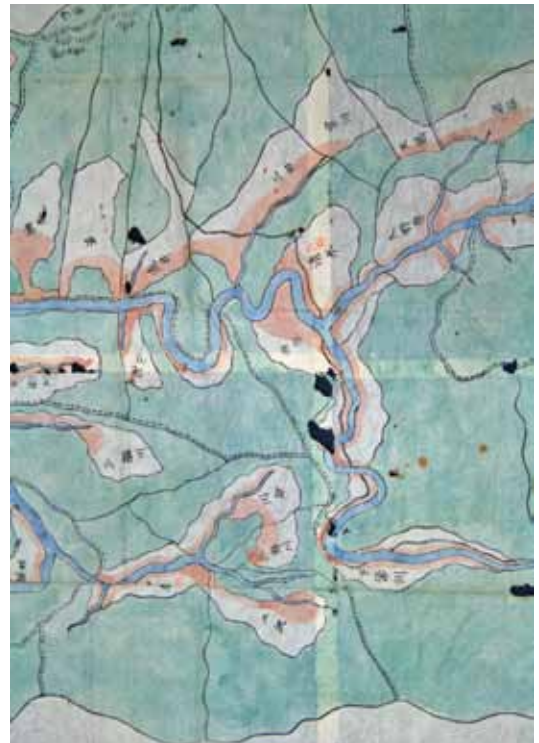


写真 3-22 明治 22 年 (1889) 有田川流域水害図 (蘭島の文化的景観地関係部分)

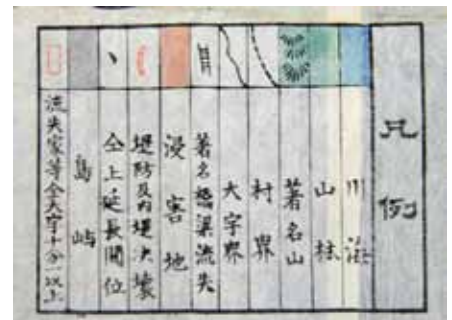


写真 3-23 有田川流域水害図凡例

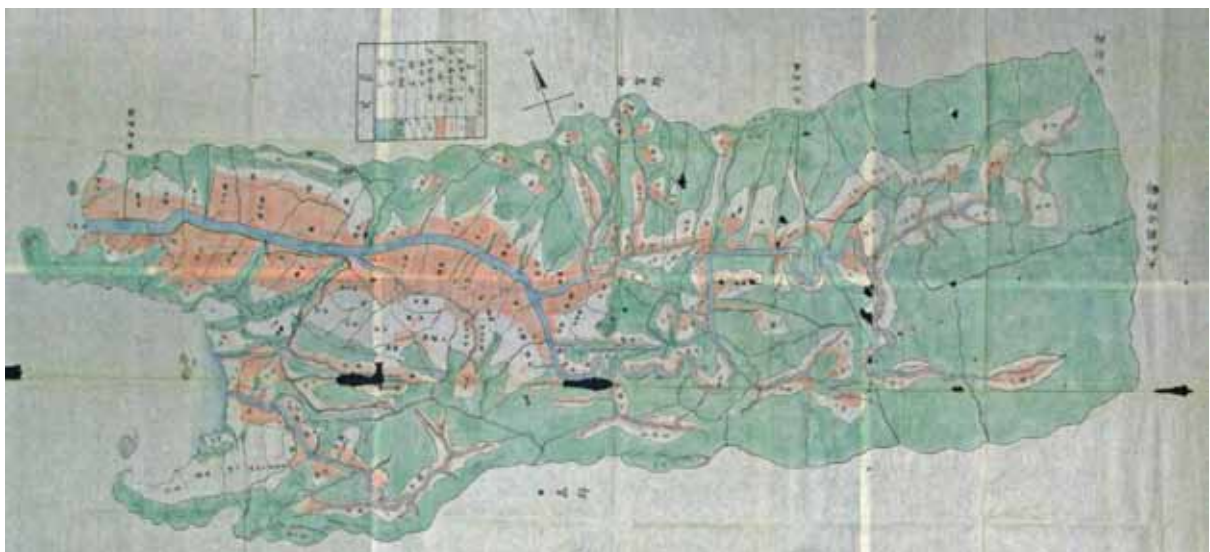


写真 3-24 明治 22 年 (1889) 有田川流域水害図 和歌山県立文書館蔵

## (2) 昭和 28 年 7. 18 水害

昭和 28 年 7 月 15 日、梅雨前線上を低気圧が発達しながら日本海に進み、低気圧の通過後、前線は 20 日まで関東から九州地方にかけて停滞した。前線の活動により、九州から東北地方にかけて日降水量が 200mm を超える大雨となった。

特に紀伊半島においては、有田川、日高川上流の護摩檀山を中心とした紀伊半島中部の山岳地帯で 18 日未明から早朝にかけての数時間に集中豪雨が降り注ぎ、山間部では 500～600 ミリを越える記録的な雨量となり、期間降水量が 700mm を超えた所があった。高野山では 450 ミリという記録があるが(表 3-20)、その下流にあたる有田川上流域では 600 ミリを越える雨量とも想定されている。

この年の 6 月上旬から 7 月上旬にかけては、降雨のない日は 6 月で 6～8 日程度、7 月上旬で 5 日程度であり、山間部にあってはほぼ毎日雨が降る状態が続き、山地は既に飽和状態に近かったことが想定されている。これに加えての集中豪雨によって、有田川、日高川へ雨水が流入、増水し、本支流河川が決壊して大氾濫となった。山間部では大規模な山崩れが各所で発生し、有史以来の山津波が起こった。

18 日の午前 4 時半には、蘭島の上流に位置する清水橋の上を超流しているとの第一報が八幡村駐在の技師より湯浅土木出張所に入っており、この段階で既に 6 m を越える増水であったことが想定される。最終的には、有田川下流域で 10 m を越える増水を記録し、18 日午前 6 時頃からは各河川で堤防が決壊し始め、田畑、人家を押し流して一面泥海と化した。

県内における人的被害は、死者 615 人、行方不明者 431 人、重軽傷者 6,600 人以上、家屋の全壊流出 8,600 棟余り、被害者総数 25 万人という大惨事となり、県下史上最悪の気象被害となった(表 3-21)。最も被害の大きかった有田郡では、総人口の約 6 割が水害の被災者となり、旧清水町でも 90 人近い犠牲者を出した。

県はただちに災害救助法を発動し、警察保安隊や米軍の救援を得て、復旧作業に取りかかったが、食糧や救援物資は空からと人力による以外になかった。橋梁、道路の大半が流出したため交通網が寸断され、復

表 3-20 昭和28年7月17日～18日の降水量

地名	17日	18日	計
和歌山	46.5	85.6	132.1
応其	119	37	156
橋本	140	100	240
高野山	387	65	452
竜神	450	100	550
清川	357	175	532
田殿	152.1	92.7	244.8
湯浅	187.1	94.6	281.7
御坊	99.7	埋没	99.7
田辺	87	158.8	245.8
日置	58.9	93.7	152.6
潮岬	21	75.1	96.1
栗栖川	204	125	329
色川	56	88	144
七川	122.7	74.5	197.2
近野	300	136	436
市鹿野	137.2	117.2	254.4
真国	388	44	432
上山路	337	130	467
玉置山	323	166.8	489.8
五條	109.7	20.1	129.8
猿谷	484.2	45.6	529.8
立里	483	155	638
平谷	410	210.6	620.6
前鬼	564.7	100.9	665.6
河合	404	99	503
大台ヶ原	276.8	75.5	352.3
寺垣内	348.5	99.2	447.7
五郷	292	72	364
大沼	200	60	260
八鹿	170	54.7	224.7

出典：和歌山県災害史



写真 3-25 水害直後の粟生小学校

表3-21 郡別被害状況（昭和28年9月和歌山県調査）

	海草郡	那賀郡	伊都郡	有田郡	日高郡	西牟婁郡	東牟婁郡	計
死者（人）	21	2	105	242	243	2	-	615
行方不明者（人）	7	-	85	284	55	-	-	431
負傷者（人）	735	280	701	4,365	1,470	5	107	7,663
住家全壊（戸）	254	39	85	2,096	1,552	5	199	4,230
住家流失（戸）	471	124	191	2,022	1,380	2	251	4,441
床上浸水（戸）	1,496	1,362	741	3,707	5,109	197	271	12,883
床下浸水（戸）	6,010	4,817	3,348	3,513	3,291	1,111	160	22,250
農業被害（千円）	158,365	709,507	202,230	1,804,312	1,123,478	36,754	41,463	4,076,109
林業被害（千円）	120,310	39,002	292,511	1,006,379	817,633	34,650	146,554	2,457,039
水産業被害（千円）	38,830	-	-	77,378	79,923	120	5,644	201,895

出典：和歌山県災害史

旧作業は困難を極めた。特に陸の孤島と化した有田川上流部の中でも、奥有田地域では、完全に交通網が途絶し、1ヶ月を経過してようやく連絡がつくようになったが、食糧をはじめとする物資輸送は女性、子供も総動員して道なき道を人肩で運ぶ、いわゆる蟻輸送が続けられた（写真3-26）。

災害復旧の過程で建築された仮設住宅は、一戸5坪の応急住宅の他、災害で流出した戸数の五割について災害公営住宅が建てられたが、これらの仮設住宅は、その多くが解体や改築を伴いながらも、増築によって家屋として今も使用されているものや現在も納屋として使用され、現在の景観の一部を構成している。

### （3）蘭島の文化的景観と7.18水害

有田川流域に壊滅的な被害をもたらした7.18水害は、蘭島の文化的景観地域にも大きな影響を及ぼした。7.18水害後に林野庁によって撮影された空中写真を解析した結果、有田川流域の農地が大きく冠水し、その中でも蘭島の低位段丘面の水田、西原湯子田地区のほぼ全域が洪水深度が大きく、甚大な被害を受けた状況が確認された（図3-9）。また、蘭島の北側対岸にあたる三田地区では、土砂災害が多数発生し、現在、展望所としての空間利用に繋がる土砂崩れもこの水害によって発生した（写真3-27）。

7.18水害時の蘭島の状況について、聞き取り調査をもとに復元したものが図3-10である。蘭島では、段丘崖を境に、低位側の広い範囲が冠水し、特に河川に面した1ha以上の水田と、2軒の家屋が流出している。河川際の水田は、



写真3-26 蟻輸送



写真3-27 蘭島の対岸（三田区）昭和43年（1968）

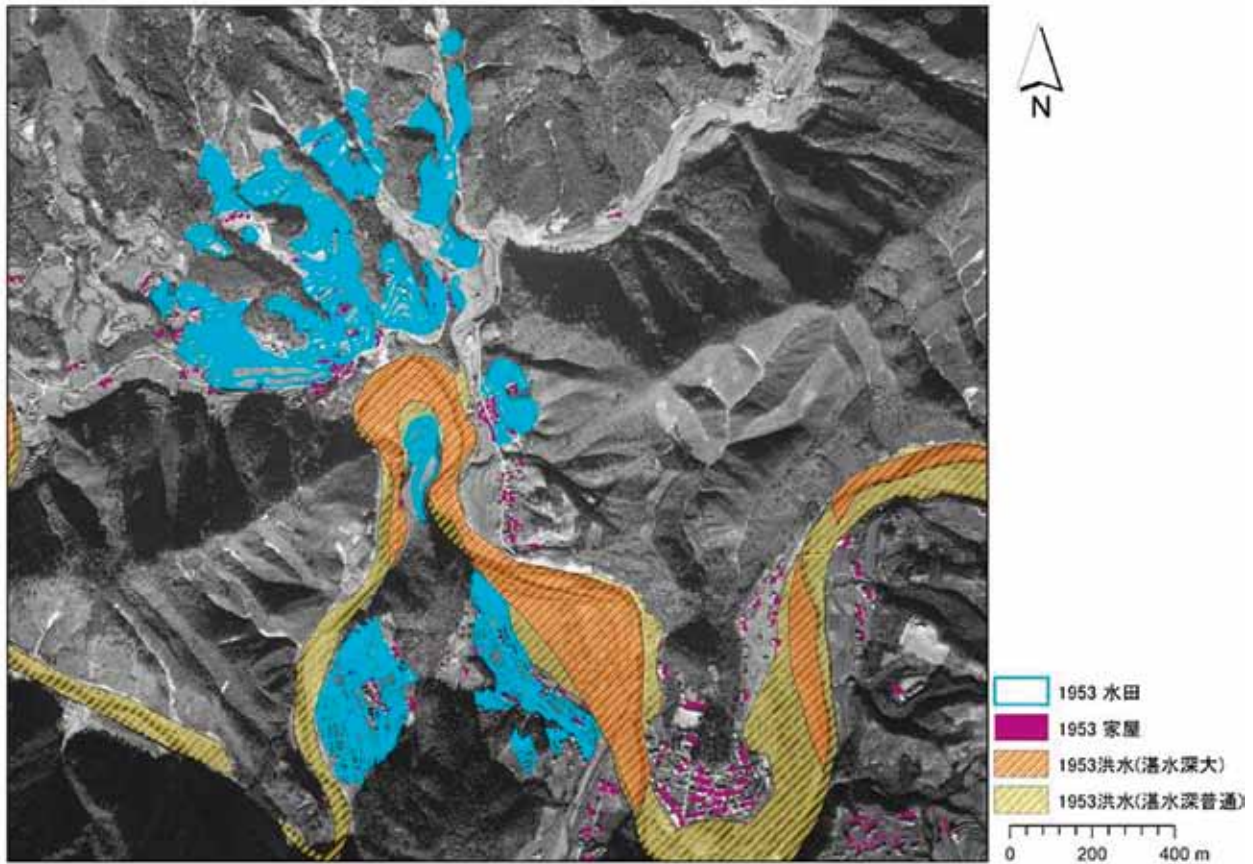


図 3-9 7.18 水害被害状況図

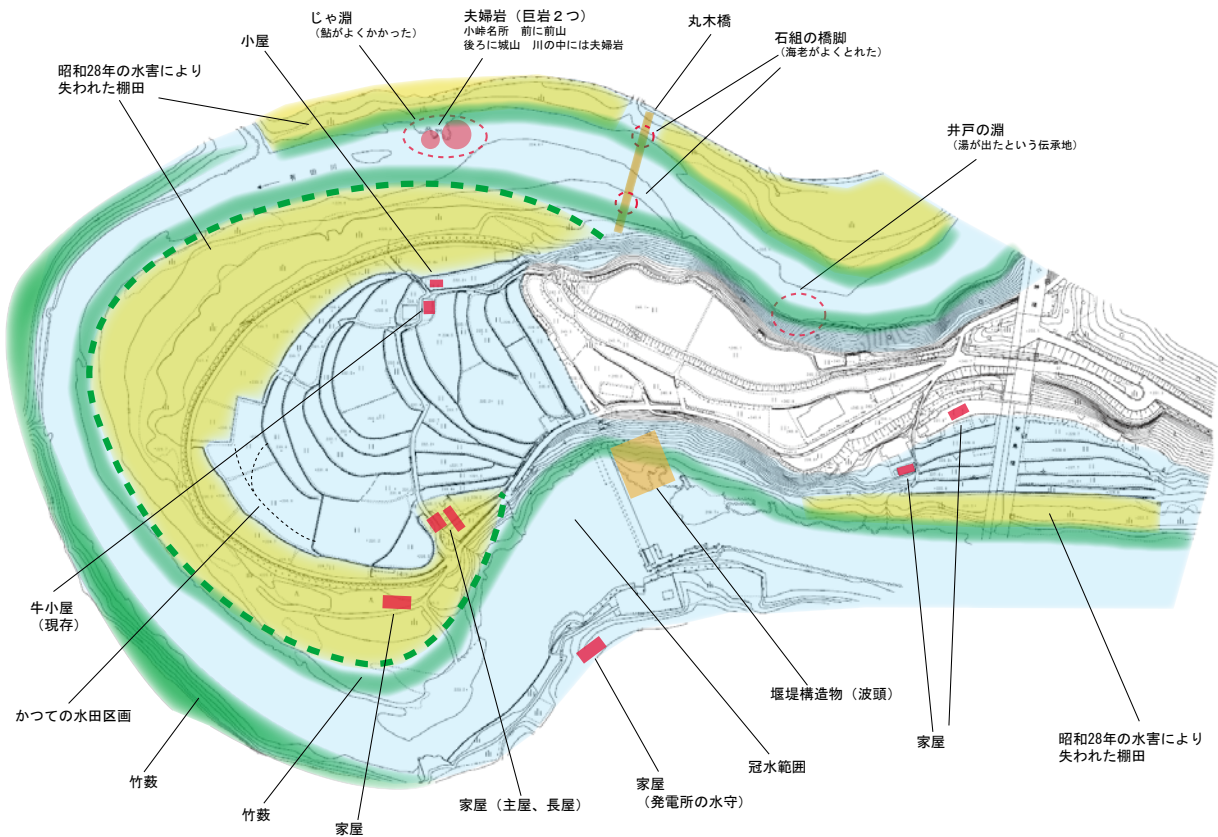


図 3-10 7.18 水害前後の蘭島の状況図 (S=1/3000)



写真 3-28 小峠から水害以前の蘭島を望む  
河川は竹藪で覆われ、写真奥に民家が確認される



写真 3-31 水害以前の西原  
有田川に面して棚田景観が確認される



写真 3-29 水害後の蘭島  
昭和 29 年撮影（「ふるさと清水」より抜粋）



写真 3-32 水害直後の西原湯子田地区  
僅かながら、棚田の石積みが確認できる



写真 3-30 護岸工事後の蘭島  
昭和 35 年撮影（「ふるさと清水」より抜粋）



写真 3-33 圃場整備後の西原湯子田地区  
昭和 39 年撮影

その後の護岸工事によって完全に失われ、現在みる景観へと変容した（写真 3-28～30）。西原湯子田地区についても、低位段丘面のほぼ全域が冠水し（写真 3-32）、災害復旧にあたっては圃場整備が行われ（写真 3-33）、写真 3-31 にみるようなかつての棚田景観は失われた。中世の開発に起源する下湯用水路も消滅し、復旧に際して上湯用水路へと統合されることになった。また、復旧の過程において、上湯用水路も土水路からコンクリートを使用した水路へと変更され、取水口もやや下流の現在地へと移り、コンクリート構造に改められた。

地域住民のヒアリング調査の結果、7.18 水害を境にゲンゴロウなどが見られなくなったという話があり、生態系へも影響を及ぼした可能性が想定されるが、これは水田の被災によって、2・3 年間は水田耕作が中断したことによって水田が干上がり、従来の灌漑システムや農耕サイクルが途絶したことに起因するものと考えられる。生業の面では、陰りを見せていた保田紙の生産が水害によって壊滅的な被害を受け、一気に衰退が進んだ。また、復興事業に伴い新たに建築業の従事者が増加し、建築木材の需要が増加したことによる造林施策が進行し、雑木山から植林山へと当地域の山容は大きく変化するなど、生活、生業、生態系等あらゆるものに変化をもたらした。

景観認知についても影響が認められ、7.18 水害を体験し、水害以前の景観を知る人々にとっては、現在の景観が本当の姿ではないとの思いを強く、水害経験者と未経験者の間において大きな景観認知の相違が生まれていることが看取された。

#### (4) 平成 23 年台風 12 号 紀伊半島大水害

平成 23 年 8 月 25 日、マリアナ諸島近海で発生した台風 12 号は、強い勢力を保ちながら北上し、9 月 3 日 10 時頃に高知県東部に上陸した。その後、ほぼ真北に進路をとり、四国地方、中国地方を縦断し、4 日未明に日本海へ抜けた。台風 12 号は、大型で動きが非常に遅かったために、長時間にわたって台風周辺の非常に湿った空気が流れ込み、西日本から北日本の山沿いを中心に広範囲かつ長時間にわたって影響を及ぼした。特に台風の進路の東側にあたっていた紀伊半島では、古座川町西川の 1,114mm をはじめ、各地で観測史上最高の降雨値を記録し、9 月 2 日から 4 日の 3 日間で、年間降雨量の約半分の降雨量となる記録的な大豪雨となった。

このため、土砂災害、浸水、河川のはん濫や土石流等により、和歌山県、奈良県、三重県などで多数の死者、行方不明者を伴う被害が発生し、また深層崩壊という大規模な土砂崩れによりせき止め湖が発生し、一時避難指示が出されるなど厳戒態勢が続いた。

特に紀伊半島では、那智熊野方面を中心に甚大な被害となり、和歌山県内では死者 56 名、行方不明者 5 名、住宅の全壊 367 戸、半壊 1,840 戸、住宅の床上浸水 2,680 棟、床下浸水 3,147 棟などの被害が出た。また、熊野那智大社では裏山が崩れ、本殿の一部が土砂で埋没するなど世界遺産「高野熊野の霊場と参詣道」をはじめとした文化遺産にも影響をもたらした。

有田郡では人的被害はなかったが、各地で道路の陥没や土砂災害が多数発生した。有田川流域

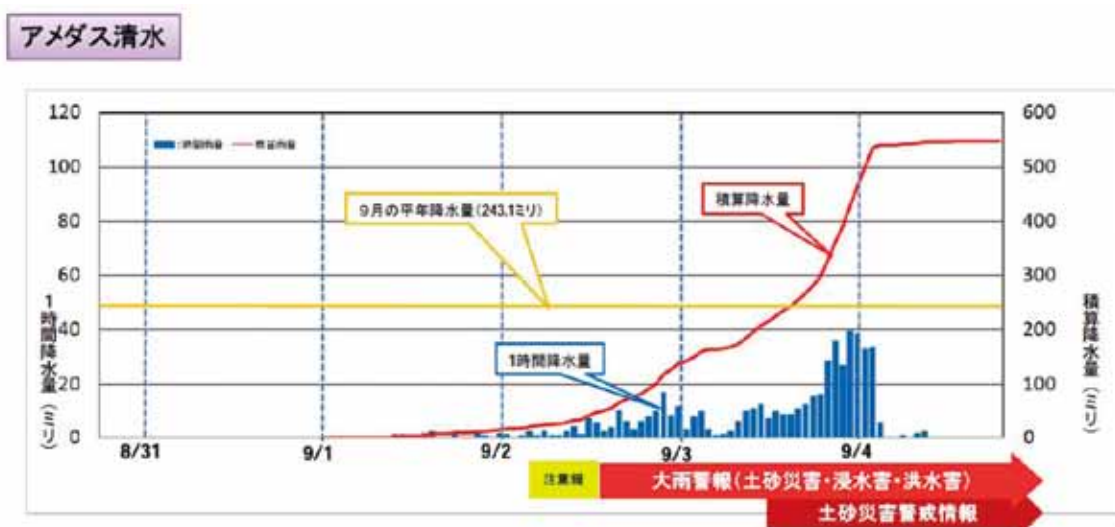


図3-11 アメダス時系列(降水)グラフ(8月30日18時~9月4日19時) 和歌山気象台HPより



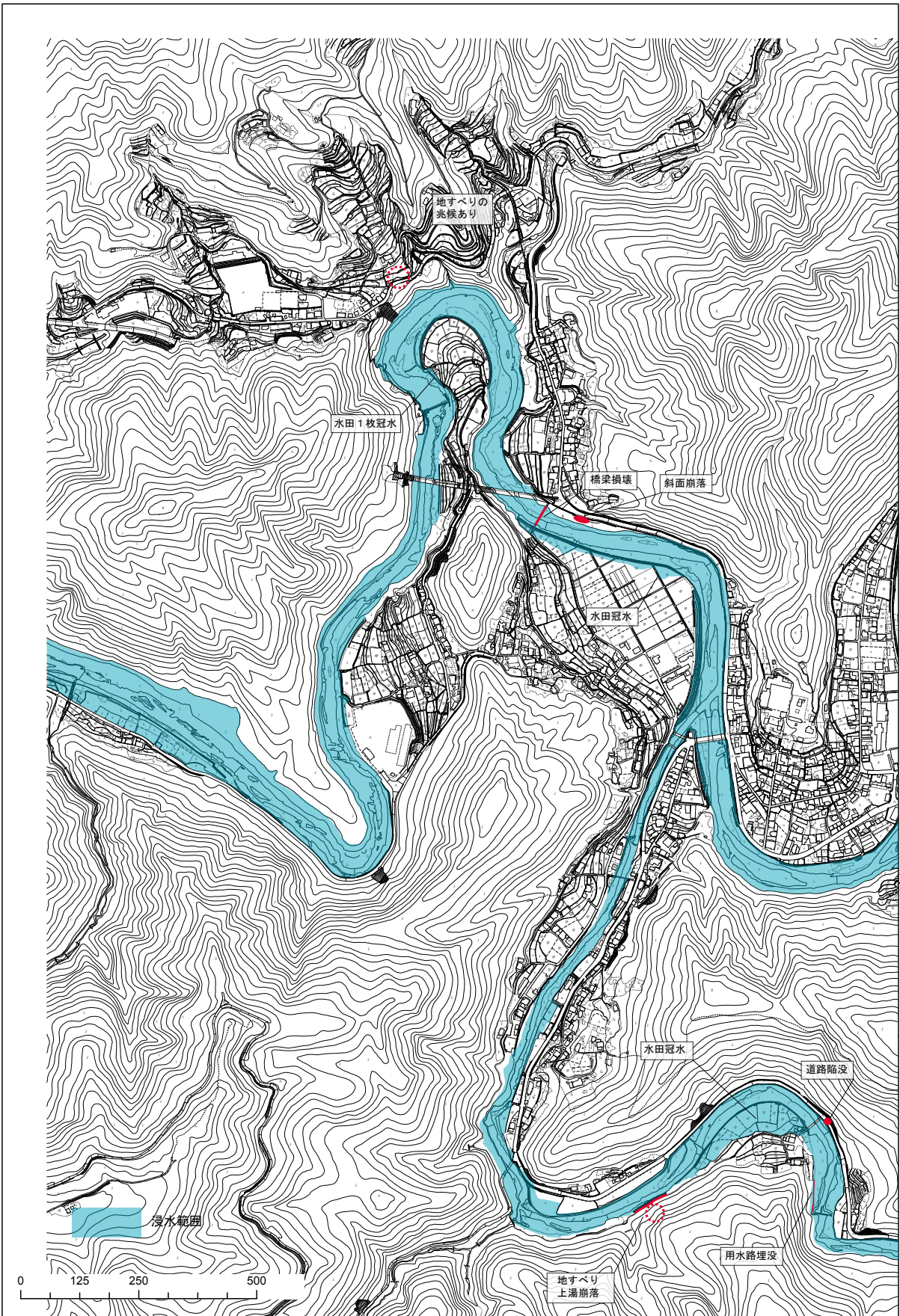


図 3-12 蘭島と周辺地域における台風 12 号の被害状況図



写真 3-34 水害直後の蘭島

河川敷の草木が流され、護岸がはっきり見えるようになった。



写真 3-35 蘭島の冠水した水田

蘭島では、水田 1 枚と獣害対策の網に被害が出た。



写真 3-36 水害直後の三田水力発電

旧取水口をはるかに越える水がおしよせたことが分かる。



写真 3-37 水害直後の西原湯子田の状況

小峠橋は欄干が流出し、付近の水田も多くが冠水した。



写真 3-38 水害直後の湯子川の状況

湯子川に面した場所であり、土砂が大きく堆積している。



写真 3-39 湯子川の冠水した水田

上湯より河川側にある大半の水田が冠水被害を受けた。



写真 3-40 水害直後の上湯取水口の状況

写真左端が上湯水路であるが、礫で大きく埋没している。



写真 3-41 上湯の被災状況

上部の地すべりによって約 100 m にわたって崩落した。

では、昭和 28 年の 7.18 水害以来、58 年ぶりとなる大きな水位上昇が確認され、河川の護岸整備がなされていないければ、それ以上の被害に繋がったという声が多数聞かれた。

蘭島の文化的景観地域が位置する有田川町清水では、9 月 3 日に日降水量が 333mm を測り、1976 年の統計開始以来記録を更新した他、8 月 30 日 18 時～9 月 4 日 24 時における降水量は 548mm を記録した（図 3-11）。蘭島の文化的景観地域における浸水被害範囲を示したものが図 3-12 であるが、昭和 28 年の 7.18 水害には及ばないものの、低位段丘面にあたる湯子川広井原地区、西原湯子田地区、蘭島の水田がそれぞれ浸水し、特に湯川川左岸の湯子川広井原地区において広範囲に浸水被害となった（写真 3-34～39）。また、上湯取水口付近では多量の土石が堆積し、上湯用水路も埋没し、一部の区域では上部の地すべりによって約 100 メートルにわたって上湯用水路が崩壊した（写真 3-40・41）。この他、昭和 28 年の 7.18 水害で地すべりのあった三田区展望所付近において、新たに地すべりの兆候が現れた。

### （5）災害と文化的景観の保全

以上、近代以降における 3 件の大水害を概観し、景観の変化について概述してきたが、蘭島の文化的景観は、幾多の洪水や災害に遭いながらも、先人達による復興と代々の耕作の積み重ねによって受け継がれてきた景観であると言える。当地域においては、古来より蛇行河川によって形成された河岸段丘上に耕地や集落が形成されているが、これら蛇行河川の湾曲部内側は洪水被害が頻発する地域であり、特に堤防を有さない蘭島の農地は冠水被害が起こりやすい環境下にある。これら自然災害の常襲箇所においては、繰り返し発生する災害を想定しながら、計画的な河川整備や治山事業などの減災対策を展開していくことが望まれるが、災害に伴う公共工事は景観への影響も大きいため、その調整を果たしていくことが必要である。

これら災害史を振り返ると、自然との共生が密接であった過去においては、小規模な災害は身近なものであり、災害を見越して、共生する生活の在り方が存在していた。むしろ災害対策が進行し、大災害の記憶が薄れた現代においては、かつての浸水地域にも宅地化が進行するなど土地利用が変化しつつあり、想定外の災害が発生した際は甚大な影響を被る可能性が高く、警鐘を鳴らす必要がある。昭和 28 年の 7.18 水害から約 60 年が経過したことにより、水害の体験者も年々減少し、地域の中でもその記憶は薄れつつある中で平成 23 年に発生した台風 12 号は、大規模な自然災害は繰り返し発生することや、その脅威を改めて認識させる事象となった。

人と自然の共生によって形成された文化的景観は、その保全によって景観とともに過去の災害の記憶や歴史を後世に伝えていく役割を果たしていくことが必要であり、その意味では現在の景観に息づく 7.18 水害時の災害公営住宅等を保全していくことも意義深いことと考える。

#### 【参考引用文献】

- 和歌山県『和歌山県水害記録写真集』1953 年
- 和歌山県『和歌山県災害史』1963 年
- 株式会社有田タイムス『七・一八水害誌（復刻版）』2003 年
- 二澤久雄「明治四年五月一八日夜の暴風雨について」（『清水町文化』第 3 号 清水町文化協会 1980 年）



写真 3-42 7.18 大洪水浸水地の碑  
(有田川町清水所在)